とりたて詞「しか」における「予想」について

茂木 俊伸

筑波大学 東西言語文化の類型論特別プロジェクト 研究成果報告書
平成 12 年度

別冊「日本語のとりたて」

（2001 年 3 月）

pp.231-250

とりたて詞「しか」における「予想」について

茂木 俊伸

0. はじめに

本稿は、とりたて詞[1]「しか」の意味・機能の記述に従来用いられてきた「予想」[2]の概念に関して、その存在意義を問い直すことを目的としている。

この「しか」の「予想」は、共に「限定」の意味を表すとされるとりたて詞「だけ」「しか」の交替の可能性、特に(1)のような「しか（…ない）」が「だけ」に置き換えられない現象に基づき、「しか」の持つ（かつ「だけ」が持たない）意味的な概念として導入されてきたものである。

(1) a. 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎しか来なかった。
　　b. *時間までに全員来ると思っていたのに、太郎だけが来た。

本稿では、「予想」の概念の根拠となるこのような例を再検討し、「だけ」「しか」の記述にこの概念が必須のものではないことを示す。

1. とりたて詞の意味記述における「予想」

本節では、まず、先行研究において「だけ」「しか」の意味的相違を記述するために用いられている二つの概念、「予想」と「視点」に関して概観する。そして、特に「予想」について、「意外」の意味を表すとりたて詞の記述に用いられる同種の概念との比較から検討を加える。

1.1 「だけ」「しか」の相違点－先行研究の概観－

先行研究において指摘されている「だけ」と「しか」の意味・機能的な側面における相違は、おおよそ次の二点にまとめられる。

---

[1] 本稿における「とりたて詞」は、沼田(1986)の定義に従う。
[2] 先行研究では同種の概念に「予想」「予測」「期待」といった用語が用いられているが、混乱を避けるために本稿の記述ではこれらを「予想」に統一する。

⑵　「予想」の有無：

「しか」は、とりたてる要素（＝「自者」）以外の要素（＝「他者」）に関する当該の命題の成立（／自者以上の量の達成）が、話者によってあらかじめ「予想」され、これが実現（／充足）されないことを示す[3]。一方、「だけ」はこの点に関して中立的に用いられる。

⑶　「視点」の差：

「だけ」は「自者に関して当該の命題が成立する」旨の叙述を主として行うが、「しか」は逆に、「他者に関して当該の命題が成立しない」旨の叙述を主として行う。

まず、⑵の「しか」に「予想」が関与するという点に関しては、特に次の⑷のような「数量詞＋しか…ない」構文において、「しか（…ない）」が「当該数量（＝自者）が予想された数量に達しなかったことを示す」という形で論じられている（井島(1992)[4],山中(1993)等）。

⑷　（50 人は来ると思ったのに、）15 人しか来なかった。

一方で、この「予想」を「しか」一般に備わった意味・機能として記述する立場もある（寺村(1991),沼田(1993),中西(1995),吉田(1998)等[5]）。例えば、沼田(1993)による「だけ」「しか」の意味記述は次のようなものであり、「含み」における「予想」の有無が、「だけ」「しか」の相違点として記述されている[6]（カ

---

[3] 他者だけでなく自者に関してもこのような「予想」を想定する研究もある（沼田(1993)等）が、このような「予想」の範囲の差は本稿の論に影響を及ぼさない。

[4] 井島(1992)で用いられている「期待」の概念は、語彙的な意味ではなく、ある種の「言語規約的含意」として規定される（cf. 井島(1996)）。とりたて詞における「予想」の概念の厳密な位置付けについては、さらに検討が必要である。

[5] 伊藤(1996a,b)は、自者から他者の集合が「予想」されるとする一方で、山中(1993)における「期待」は「しか」の本質的な概念ではない旨の指摘をしている。この「予想」を「（他者の）想定」（あるいは他者の「存在の前提」（坂原(1986)））に近い用語として捉えれば、伊藤の論は本稿の意味での「予想」を否定する立場に立っていると言える。しかし、伊藤(1996a)は、例えば「太郎だけが来た」の「前提」として、「（太郎や次郎や花子が）来るだろう」（下線筆者）という話者の認識が存在するとしている(p.3)ため、本稿の論との単純な比較は難しい。

[6] さらに「しか」に関しては、解釈に「負（マイナス）の評価」が伴われるという指摘がある（佐藤(1986)等）。しかし、三枝(1988),山中(1993),伊藤(1996b)等が述べているように、「しか」は必ずしもマイナス評価と対応しない（(ib)）。本稿でもこのような「評価」性は「しか」の本質的な意味内容ではないと考える。

(i) a.　（もっと人数を絞るつもりが）25 人しか落ちなかった。（「25 人＝マイナス評価」解釈）

b.　（入念な事前指導の甲斐あって）25 人しか落ちなかった。（「25 人＝プラス評価」解釈）

ッコ内は筆者)。

(5) a. 太郎<u>だけ</u>が来た。

「だけ」: 主張・断定・自者肯定 (例:太郎が来たが、)
か つ
含み・断定・他者否定 (例:それ以外の人は来なかった)

b. 太郎<u>しか</u>来なかった。

「しか」: 主張・断定・自者否定[7] (例:太郎が来たが、)
か つ
含み・断定・他者肯定 (例:それ以外の人は来なかった)
予想・自者否定 (例:太郎が来るだろうし、)
他者否定 (例:それ以外の人も来るだろう)

次に(3)の「だけ」と「しか」の「視点」の違いであるが、次の(6)にまとめた寺村(1991)の記述(pp.164-165)が直感的に最も分かりやすい形でこのことを示している。

(6) a. 「だけ」… 「表の意味」:<X についてPである>
「影の意味」:<X 以外のものについてPでない>
b. 「しか」… 「表の意味」:<X 以外のものについてPでない>
「影の意味」:<X についてPである>

同様の指摘は他にも見られる(Kato(1985),三枝(1988),中西(1995),久野(1999)等[8])が、この点に関して沼田(1993)は「視点」の概念を用いて次のように記述している(p.53)。

(7) 「しか」の持つ特殊な視点とは、自者から他者に移動する「視点」、あるいは、自者に対する「虚の視点」と他者に対する「真の視点」の二重構造を持つ「視点」とでもいえるものである。

---

[7] この「自者否定」は、意味的には(「太郎が来た」から)「自者肯定」であるとも考えられるが、沼田(1986)等の一連の記述体系では否定辞「ない」の存在を考慮した「自者否定」(「太郎が来なかった」+「ない」→「太郎が来た」)とされている。「含み」の記述についても同様である。
[8] 松井(山森)(1996)における「しか」の意味解釈の産出プロセスもこのような観点を支持すると考えられる。

すなわち、先の(5)の「だけ」「しか」の意味記述に沿って考えれば、「だけ」は「自者肯定」の「断定」に、「しか」は「他者肯定」の「断定」に、話者の基本的な「視点」が置かれるということになる。

さて、以上二つの概念を見てきたが、本稿では、このうちの「視点」の概念が導入されれば「予想」の概念は不要となる、と考える。このことは具体的な現象から検討する必要があるが、その前に、この「しか」の「予想」について、「意外」のとりたて詞における「予想」の概念との比較から検討を加えておく。

1.2　「さえ」の「予想」と「しか」の「予想」

沼田(1986)は、「意外」のとりたて詞「さえ」「まで」「も$_2$」の意味を次のように記述している（以下、これらを「さえ」で代表させる）。

(8)　太郎<u>さえ</u>来た。

「さえ」：	主張	・断定	・自者肯定	（例：太郎が来た）
		か	つ	
	含み	・予想	・自者否定	（例：太郎は来ないだろう）
			他者肯定	（例：他の人は来るだろうが、）

この「さえ」の「予想」における自者・他者に関しては、話者による、自者・他者に対する命題成立可能性の大小の把握が問題となり、その分析にはある種の「スケール」の概念が導入される（山中(1991),定延(1995)等）[9]。これに沿った分析をすると、「自者は他者に比べて当該の命題が成立する可能性が低い」という認識に基づいた「予想」（自者否定の予想）に反し、あくまでも自者に関して命題が成立する（自者肯定の断定）ことのギャップから、「さえ」の「意外」の意味が導き出されることになる。

ここで、再び「しか」における「予想」を検討してみる。

(5)　b. 太郎<u>しか</u>来なかった。

「しか」：	主張	・断定	・自者否定	（例：太郎が来たが、）
		か	つ	
	含み	・断定	・他者肯定	（例：それ以外の人は来なかった）

[9] このスケールに関する問題の整理は茂木(1999)で行った。

予想 ・ 自者否定　　（例：太郎が来るだろうし、）
他者否定　　（例：それ以外の人も来るだろう）
〔再掲〕

「しか」の場合、「含み」の内部で他者に関して「断定」と「予想」の間にギャップが生じるものの、「当該の命題について自者は他者に比べてどうである」というスケールの存在は明らかではない。したがって、用語としては共通するものの、「しか」の「予想」は、命題成立可能性スケールの関与が少なくとも必須のものではないという点で、質的に「さえ」のそれとは異なると言える[10]。事実、「さえ」の「予想」（とそれに基づいた「意外」性）は常に認識可能であるのに対し、「しか」の場合、「数量詞＋しか…ない」構文（(4)参照）ではない次のような例では、「予想」の有無が判然としない。

(9) a. 君に夢中で君のことしか考えられないよ。
b. テレビでしか見たことがない料理がどんどん出てきた。
c. これほど大きな木造建造物は日本にしか存在しない。

ここから、「しか」の「予想」は、「しか」に本質的に備わった概念ではなく、承接要素（＝自者）や文脈等から外部依存的に導き出されるものと考えることができる[11]。逆の言い方をすれば、(9)のような例は、「しか」に備わった「予想」が何らかの要因で抑圧されたのではなく、単に文脈的に「予想」が想定しにくかったケースとして捉えられる。

本稿では、このような観点に基づき、次節における具体的な現象の検討から、「予想」の概念を用いずに「視点」の概念のみで従来問題となってきた現象が記述できることを指摘する。そして、続く第3節では、そこで問題となる「し

---

10 「予想」の概念は、沼田(1988)の「特立」の「こそ」、「否定的特立」の「など$_2$」の記述においても用いられているが、このときの「予想」に関与するスケールは「さえ」のそれとは異なると考えられる（cf. 山中(1995)）。ここからも、この概念の定義及び適用対象が再検討されるべきであることが指摘できる。

11 「だけ」に関しても同様の考え方が可能である。安部(1999)は、「名詞句ダケ文」と「ダケダ文」の違いについて、後者の「前提集合」（自者・他者を含む要素の集合）が「発話者の主観的尺度」に基づくものであるため「不十分」「不満足」のニュアンスを帯びるのに対し、前者の前提集合にはこのような「色付け」がないとしている。これらのニュアンスが本稿で言う「予想」の存在から導かれるものならば、まさに「だけ」における「予想」の有無は、「だけ」の文中の位置あるいはフォーカスのとり方によって変化しうるものであり、「だけ」の本質的な意味概念ではないと言える。

か」の「予想」解釈がどこから生じるのかという点を、「尺度」表現との関係から再検討する。

2. 現象の分析

本節では、先行研究で問題とされてきた、「だけ」と「しか」の交替が制限される例について、具体的に検討していく[12]。

まず 2.1 節では、「しか」が許容される一方で「だけ」が許容されない例を、続く 2.2 節では、「だけ」が許容される一方で「しか」が許容されない例を扱う。

2.1 「しか」のみが許容される文

とりたて詞は、文の中核的な構造を構成するものではなく、いわば二次的・付加的な構成要素として捉えられる。したがって、少なくとも前後の文脈から独立した一つの文においては、とりたて詞を除いても（文意は変わるものの）文自体の文法性には影響しないはずである。しかし、特に複文において、とりたて詞を除いた文[13]が成立しない場合がある。

2.1.1 複文における「だけ」「しか」と「視点」

本稿の最初に挙げた例を再検討する。

(1) a. 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎しか来なかった。
　　b. *時間までに全員来ると思っていたのに、太郎だけが来た。　〔再掲〕

ここから「しか（…ない）」「だけ」を除いた元の文は(1')であるが、これは「だけ」文同様に許容されない。

(1') *時間までに全員来ると思っていたのに、太郎が来た。

このようなことから、先行研究では、従属節と主節が意味的に整合していないという点に「だけ」文が許容されない原因を求めている。例えば、三枝(1988)は、(10a)は「だけ」を除いた(10b)と同様の「前文と後文の非論理性」のため

---

[12] 本稿では、「だけ」「しか」の意味的な側面を主に扱い、格や述語連用形との承接可能性等、「だけ」「しか」に関する形態論・統語論的な相違については基本的に扱わない。

[13] 以下、このような文を「元の文」、「だけ」を含んだ文を「「だけ」文」、「しか」を含んだ文を「「しか」文」と呼ぶ場合がある。ただし、この「元の文」という用語は、二つの文が統語論的な派生関係にあるという主張を意図したものではない。

に許容されないとする(p.23)。

(10) a. *日本語は半年だけ勉強しましたから、まだ下手です。
b. *日本語は半年勉強しましたから、まだ下手です。

しかし、次のように元の文と「だけ」文の許容度は必ずしも一致せず、両者と「しか」文との対立という構図では現象を捉えきれない。むしろ、「だけ／しか」文における意味的な非整合性と、これが回避される要因が問題となると言える。

(11) a. 親子で来るように言ったのに、親だけが来た。[14]
b. *親子で来るように言ったのに、親が来た。

ただし、「だけ」文と元の文との間には大きな共通点がある。言語形式上現れている要素（とりたて詞を含む文で言えば自者）についての（言語形式に沿った形での）叙述であるという点である。一方、「しか」文は、とりたてる要素についての叙述をするようには見えるが、この叙述の肯定文的なあり方（文の意味的側面）と文末の否定辞「ない」（文の形式的側面）とが整合せず、「「しか」文は何についてどのように述べているのか」ということを表面的な形式から決定することはできない。

ここで、先に(3)で挙げたような「しか」の「視点」の特殊性が存在すると仮定する。この点に関しては、久野(1999)に興味深い例がある（p.298:(27)）[15]。

(12) a. 太郎$_i$だけが生き残った。φ$_i$冬の装備をしていたからだ。
b. ??/*太郎$_i$しか生き残らなかった。φ$_i$冬の装備をしていたからだ。

このような文連鎖から、「しか」は少なくとも自者に関する叙述（以下「自者叙述」とする）を行う「だけ」とは異なる視点をとることが確かめられる[16]。

ここで再び(1)の議論に戻る。先に見たように、「しか」が自者ではなく他者に関する叙述（以下「他者叙述」とする）を主とする「視点」を持つならば、(1a)においては「自者以外の要素（＝他者）については命題が成立しない」こ

---

14 (11)のような例では多くの場合「しか」文も成立する（例：親子で来るように言ったのに、親しか来なかった）。この種の文の特徴としては、((11)で言えば「親子」という語として）想定される要素が文脈上にすべて挙がっているという点が挙げられる。

15 引用の際一部表記を改めた。例文中の指標「i」は、これを伴う要素が同一の指示対象を持つことを示す。

16 二つのとりたて詞が連続した「だけしか」の場合、「視点」に関しては「しか」と同様の振る舞いを見せるが、このメカニズムについては今のところ明らかではない。

とが問題になっており、実際には(1')ではなく(1")が断定されていることになる。

(1") 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎以外は来なかった。

ここから、(1b)の「だけ」文が（元の文同様）自者叙述を行っているために許容されないのに対し、(1a)の「しか」文はこれとは異なる他者叙述を行うことにより、このような複文内の意味的な非整合性が問題とならないことになる。

そもそも、「だけ」「しか」が（とりあえずはこれらの要素の担う「限定」の範囲において）意味論的に同じ「意味」を持つと仮定すると、どちらの形式を用いても(13)のような内容を表現しうるはずである。

(13) 時間までに全員来ると思っていたのに、太郎が来たのみで、それ以外に来た人間は存在しない。

しかし、(13)を問題なく表す実際の形式としては「しか」が選択されなければならない。つまり、とりたて詞の「意味」以外の何らかの要因が、二つのとりたて詞の選択に関与していることになる。

「だけ」「しか」の自者叙述／他者叙述は、必ず肯定／否定という対立を成すが、これは、自者／他者のいずれか一つを肯定的に叙述すれば、必然的に他方の否定的な叙述が成立する関係として捉えられる。ここに「自者／他者のどちらについて叙述するか」の選択の余地が生じるわけであるが、あるレベルにおいてこの選択に関わるのが「視点」の概念であると考えられる。

2.1.2 「しか」文と「だけ」分裂文

(1)のような例に関連してさらに考えなければならない問題は、「だけ」文を分裂文にした場合には許容度の問題がなくなり、「しか」文と同様に許容されるという現象である（cf. 三枝(1988),徐(1994),吉田(1998),久野(1999)等)。

(14) a. *時間までに全員来ると思っていたのに、太郎だけが来た。 （=(1b)）
b. 時間までに全員来ると思っていたのに、来たのは太郎だけだ。

しかし、(14)における許容度の差を「しか」のような「視点」の特殊性に還元できないことは、分裂文の形をとる「だけ」文（以下「「だけ」分裂文」とする）に先の久野のテスト（(12)）を適用することにより確認できる。

(15) ?生き残ったのは太郎 $_i$ だけだった。ϕ_i 冬の装備をしていたからだ。

このような文連鎖において「だけ」分裂文が「しか」文よりもむしろ「だけ」文に近い許容度を示すことから、「だけ」分裂文が「しか」と同じ「視点」をとるとは断定できない。

興味深いことに、「だけ」分裂文と「しか」文の近接性は、このような許容度の問題だけではなく、文の意味解釈においても見られる。

(16) a. 太郎が合格点を越えたので、会議で問題となった。　(元の文)
b. 太郎だけが合格点を越えたので、会議で問題となった。　(「だけ」文)
c. 太郎しか合格点を越えなかったので、会議で問題となった。(「しか」文)
d. 合格点を越えたのが太郎だったので、会議で問題となった。
(元の文の分裂文)
e. 合格点を越えたのが太郎だけだったので、会議で問題となった。
(「だけ」分裂文)

これらの文は、その解釈のあり方から大きく二つのグループ（(16c,e)と(16a,b,d)）に分けることができる。このうち、「しか」文(16c)と「だけ」分裂文(16e)では、

(16') 命題「合格点を越える」を満たした人は太郎一人だ、という今年の受験者のあり方が会議で問題となった。

という、当該の命題に関係する自者・他者を含む要素の集合－これを安部(1999)に従い「前提集合」と呼ぶ－の全体（上の例では例えば「受験者」）を問題とする解釈が可能である。これに対し、それ以外の元の文(16a)とその分裂文(16d)、「だけ」文(16b)では、

(16'') 命題「合格点を越える」を太郎が（単独で）満たした、という個体「太郎」のあり方が会議で問題となった。

という解釈となり、前提集合全体は問題にならない。

このことは、次の文連鎖からも確認できる。

(17) 太郎だけが時間どおりに来た。
a. やっぱり律儀な奴だ。　(自者叙述)
b. *いつもながら集まりが悪い。　(自者＋他者（＝前提集合）叙述)
c. *どこで油を売っているのだろうか。　(他者叙述)

(18) 太郎しか時間どおりに来なかった。

a. *やっぱり律儀な奴だ。　（自者叙述）

b. いつもながら集まりが悪い。　（自者＋他者叙述）

c. どこで油を売っているのだろうか。　（他者叙述）

(19) 時間どおりに来たのは太郎だけだった。

a. ?やっぱり律儀な奴だ。　（自者叙述）

b. いつもながら集まりが悪い。　（自者＋他者叙述）

c. *どこで油を売っているのだろうか。　（他者叙述）

これらの例から、「だけ」は文が分裂文であるか否かに関わりなく他者（上の例では「太郎」以外の人）の叙述を行わず、この点で「しか」と対立する（ここまでは「視点」の問題である）が、一方で「だけ」分裂文については、「しか」と同じく前提集合（上の例では「来る」予定の人全体）を問題にしうることが確かめられる。この点について、それぞれの文の持つ特徴から考えてみる。

まず、「だけ」文では、「だけ」の「視点」から自者叙述が行われ、そこから前提集合全体から自者を除く形で他者叙述が導き出されるとすると、前提集合が関与するのはあくまでもこの二次的な他者叙述の段階であることになる。したがって、「だけ」文が解釈上前提集合を優先的に問題にすることは非常に困難であると考えられる。

これに対し、「しか」文と「だけ」分裂文では、むしろこの前提集合の関与が文の解釈において重要な意味を持つ。

先に述べたように、「しか」文は他者叙述の「視点」を持つが、これは解釈上、まず言語形式として現れている自者と前提集合とを照らし合わせ、当該の命題を満たさない他者の範囲を引き算的に確定するプロセスを要求するものと考えられる（cf. 松井（山森）(1996)）。つまり、「しか」文の解釈は当初の段階から前提集合が関与することによって導き出されるものと考えられる[17]。

一方、「だけ」分裂文のこのような特徴は、「だけ」から語彙的に生じているものではなく、典型的には前提集合を談話上のトピックとして引き継ぐタイプ

---

17 「しか」の前提集合との関わりを示す一つの現象として、次の(i)のような構造の存在が挙げられる。「しか」は、自者とある属性を持った集合とが共起した構造をとることができる（cf. 江口(2000)）が、このとき、基本的に後者が前者を含む前提集合（の属性）として解釈される。

(i) a. 夏休みに入ってしまい、［$_{自者}$太郎］しか［$_{属性}$相談相手］がいなかった。

b. もはや［$_{自者}$細かな議論を棚上げする］しか［$_{属性}$論文を完成させる方法］がない。

の文であるという、「だけ」分裂文そのものの特性から捉えられるのではないかと思われる。(19)のように自者叙述よりも前提集合に関する叙述がやや優勢な解釈となるのは、このためであると考えられる。

以上のように、「しか」から「だけ」への交替ができない例に関しては、各とりたて詞の持つ「視点」の特性によって、またそれに伴う解釈プロセスにおける前提集合の関わりという点において、現象を記述することができる。

2.2 「だけ」のみが許容される文

次に、2.1 節とは逆に、「だけ」文のみが許容され、「しか」文が許容されないタイプの例を見ていく。このようなタイプの文に関しては、いくつかの問題が先行研究で扱われているが、まず副詞との共起関係の問題を扱うことにする。

例えば、沼田(1993)は、次の(20)(21)が許容されない理由を、「ひょっこり」「突然」の意味が「しか」の持つ「予想」と矛盾するためとしている(p.47)。

(20) a. ひょっこり昌<u>だけ</u>が現れた。
b. *ひょっこり昌<u>しか</u>現れなかった。 (＝沼田(1993),p.47:(13))

(21) a. 突然、右手<u>だけ</u>を高々とあげた。
b. *突然、右手<u>しか</u>高々とあげなかった。 (＝同:(14))

しかし、この種の副詞が「しか」と共起できる場合も存在する。

(22) 突然、太郎<u>しか</u>発言しなくなった。

ここから、このような現象は、「しか」の「予想」とは無関係に説明されうる。(21)(22)の副詞の修飾関係を構造的に考えてみると、(21b)の「突然」は「あげない」を、(22)の「突然」は、「（しなく）なる」を修飾していることが分かる。また、(20)の「ひょっこり」は、そもそも修飾可能な述語が意味的にかなり制限される。したがって、このような現象は、否定辞を含んだ構成素を直接的に修飾できないというこれらの副詞の特徴によるものと考えられる[18]。

また、命令文や意思を表す文についても「しか」の生起に制限があるが、沼

[18] この分析については、佐野真樹氏の御教示によるところが大きい。

田(1993)が示唆している(pp.54-55)ように、この問題も基本的に「視点」による分析が可能である。ここでは命令文を例に見てみる。

(23) a.　お前だけ(が)行け。
　　b. ??お前しか行くな。　　(＝沼田(1993),p.45:(7))

(23b)は、「しか」の「視点」から、次の(23')の内容が命令されていることになるが、これは被命令者（聞き手）との一対一の会話という状況を想定した場合、この状況との矛盾からかなり許容しにくくなる。逆に、被命令者の候補が複数存在する(24)のような文脈を想定すれば問題はない。

(23') ??お前以外は行くな。

(24) a. （大勢の人を前にして）お前とお前しか行くな。
　　b. （大勢の人を前にして）お前とお前以外は行くな。

また、聞き手一人に対する命令であっても、「しか」が被命令者／動作主以外の要素をとりたてる例は許容されやすい。

(25) a. お前はあいつだけを相手にしろ。
　　b. お前はあいつしか相手にするな。

これらの例から、命令文における「しか」の生起は、沼田(1993)が述べているような「予想」の文脈には必ずしも関わらず、発話状況において他者を想定できるか否かという点に左右されることが分かる。

以上のように、「だけ」のみが許容されるタイプの例についても、「予想」の概念を用いない記述が可能である[19]。

3. 「予想」と自者の特徴－どこから「予想」が生じるのか－

前節までの分析結果は、「しか」の意味記述において「予想」の概念を本質的なものとして捉える必要は必ずしもない、という方向性を示すものであった。

---

[19] 本文では触れられなかったが、「だけ」を含む条件文や「だけで」等、「だけ」が「最低限」を表すケース（久野(1999)の「「Ｓレバヨイ」構文」(pp.293-294)もこの一部と考えられる）でも、「だけ」「しか」の交替が許されない（沼田(1993),p.48-50）。しかし、この種の例については、野口・原田(1996)の指摘(p.162)の通り、「だけ」の語彙的な問題に加え、元の文の特徴からも考察を加える必要があると思われる。

しかし、先行研究で指摘されてきたような特定の構文－典型的には「数量詞＋しか…ない」構文－においては、「予想」が必須的な概念のように感じられる[20]。本節では、「しか」がとりたてる自者の特徴から、この点に関して検討する。

3.1 尺度表現

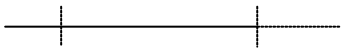
「しか」が数量表現をとりたてる場合の特徴として、先行研究では、「自者である数量に対し、他者が常にそれより大きい数量である」（沼田(1986),p.204）ことが指摘されている。

(26) a. 入部希望者は 10 人<u>しか</u>集まらなかった。　　他者は「11 人」以上の人数）

b. この大学は、最寄り駅から３分<u>しか</u>かからない。他者は「4分」以上の時間）

しかし、これは、「しか」に固有の現象ではなく、数量詞を含めた尺度[21]表現と否定との関係における一般的な現象として捉えられる。加賀(1997)は、この尺度表現に関して、尺度上の二項が対立的な（肯定／否定の）関係にある場合、尺度上の下位項（次の(27)の「P」）を肯定し、かつ上位項（同「Q」）を否定する関係のみが許されることを指摘している(pp.134-135)。

(27)



a. 「Pが肯定、Qが否定」の関係

b.*「Pが否定、Qが肯定」の関係

この点を「限定」のとりたて詞との組み合わせから考えれば、当該の命題が肯定される自者は、これが否定される他者よりも常に尺度上において下位になければならないことになる。

この一般化から「しか」の「予想」の出現を再検討してみる。

(28) a. 太郎はこの５年間で論文を３本書いた。

b. 太郎はこの５年間で論文を３本<u>しか</u>書かなかった。

---

20 「予想」が強く感じられる同様のケースとしては、先の(1)(4)のような逆接表現「のに」を含む例が挙げられる。これは、「のに」が「予想」の解釈を担いうる（cf. 渡部(2000)）ことによるものと考えられる。佐野真樹氏の御指摘による。

21 1.2節で触れた「命題可能性スケール」との区別を明確にするために、「尺度」という用語を用いる。前者では話者の仮想世界におけるある種の評価を伴った自者・他者の捉え方が問題になるのに対し、後者では現実世界における自者・他者のあり方が問題となる。前者は後者をその判断の基盤とする場合が多いが、両者は必ずしも一致しない。なお、ここで述べる「尺度」には、数量や頻度等だけでなく、「会社における役職」（例：田中さんは結局<u>係長</u>に<u>しか</u>なれなかった。）のような社会通念に基づいた形のものも含まれると考える。

このとき(28b)が(28a)にはない「不十分」のニュアンスを帯びるのは、「数量詞＋だけ／しか」において自者数量が他者数量と対比されることによる。(27)の関係から、常に自者数量は他者数量よりも小さく、これを充足しない。そして、特に「しか」の場合、その「視点」から「自者より大きい［数量／程度］（＝他者）は…ない」ことを叙述するため、「自者＜他者」の関係にありかつ否定される他者に対して「あらかじめ「予想」された（望むべき）数量／基準」という読み込みが起こりやすいものと思われる。

しかし、注意すべきなのは、これらの文の解釈における「尺度」は、「しか」によってではなく、あくまでも尺度表現たる自者（及び他者）によってもたらされるものであるという点である[22]。

また、同じ構文でも、「予想」の発生のしやすさに関して、さらに二次的な条件を見出すことができる。

これまで先行研究で挙げられてきた例は、主語が非一人称もしくは述語が自動詞であり、話者がコントロール不可能な事態を叙述したものが多い。つまり、「予想外」という読みは、事態が話者にとってコントロール不可能であることと関係するものであると考えられる。実際、これに該当する次の(29a,c)からは「（話者の）予想に反して少数」という読みが出やすいが、話者が主語でありかつ事態をコントロール可能な(29b)から「（誰かの）予想」を読み込むのは困難である。

(29) a. この話はこの三人に<u>しか</u>伝わっていない（ことが判明した）。
b. 私はこの話をこの三人に<u>しか</u>伝えていない。
c. 次郎はこの話をこの三人に<u>しか</u>伝えていない（ことが判明した）。

このように、「予想」「不十分」のニュアンスが生じる典型例は、尺度表現を自者としてとりたてる場合であり、これは自者／他者と「限定」の意味との相互関係から捉えることができる。

---

[22]「三回戦に<u>しか</u>進めなかった／*三回戦に<u>だけ</u>進めた」「たまに<u>しか</u>会わない／??たまに<u>だけ</u>会う」「係長に<u>しか</u>なれなかった／??係長に<u>だけ</u>なれた」のように、「だけ」は「しか」よりも自者・他者が連続的な関係にある尺度表現をとりたてにくい。これらの「だけ」文では自者・他者が離散的な関係にある印象を受け、このために文が許容されにくいと言える。ここにも両とりたて詞の「視点」のあり方の違いが関与している可能性があるが、具体的な分析は今後の課題となる。

3.2 関連する現象

最後に、広い意味でこのような「尺度」ととりたて詞の相互作用に関係するいくつかの現象に触れておく。

3.2.1 事象のプロセス性－「しか」文と文末「だけだ」文－

安部(1999)は、「しか」文に関して、「だけ」が文末に生起する「だけだ」文[23]との近接性を指摘している(p.42)。これは次の(31)のような例が該当する。

(30) a. 飲んだのはビール<u>だけ</u>なのに、法外な料金を請求された。
b. ビール<u>しか</u>飲んでいないのに、法外な料金を請求された。
c. ビールを飲んだ<u>だけ</u>なのに、法外な料金を請求された。

(31)（宴会において）
a. ?飲んだのはビール<u>だけ</u>なのに、もう帰らなければならないなんて。
b. ビール<u>しか</u>飲んでいないのに、もう帰らなければならないなんて。
c. ビールを飲んだ<u>だけ</u>なのに、もう帰らなければならないなんて。

まず(30)において、「しか」文(30b)では「何を飲んだか」が意味的に問題となっており、「だけ」分裂文(30a)による言い換えが可能である。この(30a,b)は、「何をしたか」を問題とする「だけだ」文(30c)とは完全に同義ではない。

一方、ここで取り上げる(31)のうち、「しか」文(31b)では文脈上まさにこの「何をしたか」を問題にできる。このとき、これは「だけ」分裂文(31a)ではなく、「だけだ」文(31c)との互換が可能である（よって、このときの(31b)の「しか」は述語までを含むＢ（後方移動）フォーカス（沼田・徐(1995),pp.195-196）をとっていることになる）。

さて、(31)のような例において重要なのは、安部(1999)が「だけ」文（「名詞句ダケ文」）のＢフォーカス成立の条件の一つとして挙げている、前提集合が「一連の手順や完結した一連の事象」(p.39:(24))であり、自者がその一連のプロセスを構成する下位事象である、という点である。

例えば(31)は、「まずはビールを飲む→さらに飲み食いする→酔って盛り上

---

[23] 「だけだ」における「だけ」に関しては、純粋なとりたて詞であるかどうか区別が難しいものがある。「気まぐれに手を差しのべた<u>だけだ</u>」のような「までだ」「に過ぎない」に近いもの、「こうなったらドアを破る<u>だけだ</u>」のような「までだ」あるいは意思の表現に近いものである。このような「だけだ」は、「わけだ」「ものだ」のような文法化したモダリティ（三枝(1988),p.24）として分析できる可能性もあるが、具体的な分析は別の機会に譲りたい。

がる」等の「宴会のプロセス」が想定される文である（あるいはそれに付随する形で「満足感の程度」といった「主観的尺度」[24]が想定されるかもしれない）。このプロセス（あるいは程度）の具体的内容は多分に語用論的なものであり、誰もが常に同じものを想定するわけではない。しかし、これも広い意味で先の「尺度」に含まれるものと考えれば、(27)の関係から自者が常に他者の下位項となることが、「こうあるはずだったのに」という「予想」あるいは「未到達」「不満足」のニュアンスを生じさせる要因として捉えられる。これは次のような「だけだ」文の例についても同様である。

(32) こんな学校燃えてしまえ、と火をつけたものの、カーテンを焦がした<u>だけ</u>だった。

ここでは、「学校が燃えるまでのプロセス」もしくは「火事の程度」において、他者として例えば「カーテンが燃え上がる→教室を一つ燃やす→校舎を一つ燃やす」等の上位項が想定される。そして、自者肯定に対立する形でこれらの他者は否定される[25]。

このように、「しか」文及び「だけだ」文がある事象のプロセスを前提集合とする場合も、3.1 節と同様の分析ができる。

3.2.2 「譲歩的な否定」の「は」

とりたて詞「は」（いわゆる「対比」の「は」）に関しても、尺度表現に関連した現象が見られる。これは、野田(1997)が「譲歩的な否定」(p.113)として挙げているものである。

(33) しかし、そのことを手放しで<u>は</u>喜べない。　（＝野田(1997),p.113:(46)）

野田によれば、(33)は、「「そのことを手放しで喜べる」という事態の成立を否定するとともに、現実的に正反対の事態である「全く喜べない」という事態が成立しないことを含意」(p.113)するとされる。このとき、解釈上問題となっているのは、「喜ぶ」ことの度合であり、(33)を次のようにパラフレーズすると、「譲歩」の解釈がより鮮明になる。

---

24 安部(1999)及び本稿注 11 参照。

25 このように具体的な他者が複数想定される場合でも、とりたて詞の意味において実質的に問題となるのは自者対他者（すなわち自者対任意の上位項（の集合））の二項対立であると考える。このような考え方は、沼田(1995)の「も$_2$」の分析（pp.31-32:(30)）に基づく。

(33') しかし、そのことを（一応は喜べるが、）手放しで<u>は</u>喜べない。

これらの例において、尺度表現として捉えられる自者「手放しで（喜ぶ）」と否定辞による否定との関係から、自者は尺度上の上位項となり、任意の下位項－例えば(33')のような「一応（喜ぶ）」－と対立することになる。なお、次のように、(33')の逆のケースを考えることもできるが、このとき自者は肯定される下位項となる。

(34) 我々はそのことを一応<u>は</u>喜べる（が、手放しでは喜べない）。

このような「～は…ない」文型に関して「譲歩的な否定」解釈が常に求められるわけではない（野田(1997),p.113）。なぜなら、この解釈は尺度表現と「は」が揃って初めて生じるものであり、「は」のみが担うものではないからである。

ここまで取り上げてきたとりたて詞「しか」「だけ」「は」に共通するのは、尺度表現（事象のプロセスの一部も含む）をとりたてることが可能であり、そのとき自者／他者を二項対立的に肯定／否定するとりたて詞であるという点である[26]。

これらが生起する文の解釈には「予想」（あるいは「譲歩」）のニュアンスが感じられる場合があるものの、これは自者・他者の尺度的関係から生じるものであり、これをこれらのとりたて詞の実質的な意味として捉える必要はないと考えられる。

4. おわりに

本稿では、「しか」における「予想」の概念の再検討を行ってきた。その結果、従来扱われてきた「だけ」「しか」が交替不可能となる例は、「視点」の概念による分析が可能であることが分かった。したがって、「予想」を「しか」の本質的意味概念として記述する必要はもはやないと言うことができる。このことは、「だけ」と「しか」の対立のみならず、とりたて詞の意味記述体系全体を考慮したときにも重要になると考えられる。

残された課題としては、まず、本稿では本質的な議論を保留してきた「視点」

---

[26] 沼田(1986)は、とりたて詞「は」については「自者肯定・他者否定」の関係からは捉えきれないことを指摘している(pp.221-222)。この問題は厳密に検討する必要があるが、少なくとも本稿で扱った尺度表現のとりたてに関しては、この関係が成り立つと考えられる。

の概念の明確化を行う必要がある[27]。これがいかなるレベルの概念として捉えられるのか、他にこの概念が有効となる現象があるのかといった点が大きな問題となる。

また、本稿の考察に関連して、数量詞のとりたてに関する研究の中で「しか」との対立において分析されてきた「も」（沼田(1986)における「も$_2$」）の扱いも問題となりうる。「しか」の「予想」の概念を語彙的なものでないとするならば、このような「も」を「単純他者肯定」の「も」（沼田(1986)の「も$_1$」）のバリエーションとして分析することも検討しなければならない[28]。

いずれも今後の課題としたい。

【参考文献】

安部朋世（1999）「ダケの位置と限定のあり方－名詞句ダケ文とダケダ文－」『日本語科学』6，国立国語研究所，国書刊行会

池田英喜（1999）「「もう」と「まだ」－状態の移行を前提とする２つの副詞－」『阪大日本語研究』11，大阪大学文学部日本語学講座

井島正博（1992）「限定表現の多層的分析」『中央大学文学部紀要（文学科）』69

井島正博（1996）「期待表現の体系」『成蹊大学文学部紀要』31

伊藤智博（1996a）「限定のあり方－「だけ」と「しか」－」『日本語・日本文化』22，大阪外国語大学留学生日本語教育センター

伊藤智博（1996b）「話し手の評価と取り立てに関する一考察－「だけ、ばかり、しか」を中心に－」『さわらび』5，文法研究会，神戸市外国語大学

江口　正（2000）「「ほか」の２用法について」『紀要（言語・文学編）』32，愛知県立大学外国語学部

加賀信広（1997）「（第Ⅱ部）数量詞と部分否定」廣瀬幸生・加賀信広『日英語比較選書 4 指示と照応と否定』研究社出版

久野　暲（1999）「「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』くろしお出版

三枝令子（1988）「「だけ」の用法」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3

坂原　茂（1986）『“さえ”の語用論的考察」『金沢大学教養部論集（人文科学篇）』23-2

---

27 時間の制約により本稿では言及できなかった沼田(2000)では、「しか」の意味記述に「予想」（沼田(2000)では「想定」）の概念は用いられておらず、「視点」の概念が限定のとりたて詞「だけ」「ばかり」「しか」の記述においてより重要な役割を果たしている。この点からも、この問題がとりたて詞の意味体系を論ずる上で一つの焦点となりうることが指摘できる。

28 この問題については、沼田(1995)に詳しい分析がある。

定延利之（1995）「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
佐藤恭子（1986）「「しか」と「だけ」の用法－名詞に接続する場合－」『日本語・日本文化』13，大阪外国語大学研究留学生別科
徐　建敏（1994）「中国語の「只」と日本語の「だけ」「しか」－とりたての観点から見た対応－」『都大論究』31，東京都立大学国語国文学会
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 Ⅲ』くろしお出版
中西久実子（1995）「シカとダケとバカリ－限定のとりたて助詞－」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版
仁田義雄（1981）「数量に関する取りたて表現をめぐって－系列と統合からの文法記述の試み－」『島田勇雄先生古稀記念 ことばの論文集』明治書院
沼田善子（1986）「（第２章）とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
沼田善子（1988）「とりたて詞の意味再考－「こそ」、「など」について－」『論集 ことば』東京都立大学人文学部国文研究室，くろしお出版
沼田善子（1993）「「少しだけあるから‥‥」と「少ししかないから‥‥」」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究（平成４年度筑波大学学内プロジェクト助成研究(B)研究成果報告書（研究代表者：北原保雄））』筑波大学文芸・言語学系
沼田善子（1995）「現代日本語の「も」－とりたて詞とその周辺－」つくば言語文化フォーラム(編)『「も」の言語学』ひつじ書房
沼田善子（2000）「（第３章）とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法２時・否定と取り立て』岩波書店
沼田善子・徐建敏（1995）「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
野口直彦・原田康也（1996）「とりたて助詞の機能と解釈－量的解釈を中心にして－」郡司隆男(編)『日文研叢書 10 制約に基づく日本語の構造の研究』国際日本文化研究センター
野田春美（1997）『日本語研究叢書９ 「の（だ）」の機能』くろしお出版
松井（山森）良枝（1996）「自然言語における量化と否定の相互作用－「シカ…ナイ」構文を例として－」『人文学報』77，京都大学人文科学研究所
茂木俊伸（1999）「とりたて詞「まで」「さえ」について－否定との関わりから－」『日本語と日本文学』28，筑波大学国語国文学会
森本順子（1992）「誤用研究ノート－「だけだ」を中心にして－」藤森ことばの会(編)『藤森ことば論集』清文堂出版
山中美恵子（1991）「「も」「でも」「さえ」の含意について」『日本語と中国語の対照研究』14，日本語と中国語対照研究会，神戸大学

山中美恵子（1993）「限定と否定」『日本語教育』79，日本語教育学会
山中美恵子（1995）「「とりたて」という機能－「こそ」を中心に－」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
吉田和史（1998）「だけ，しか，only」『言語の普遍性と個別性に関する記述的・理論的総合研究（平成７年度～平成９年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(B)(2)研究成果報告書（研究代表者：鷲尾龍一））』筑波大学現代語・現代文化学系
渡部　学（2000）「逆接表現の記述と体系－ケド、ワリニ、ノニ、クセニをめぐって－」『現代日本語研究』7，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
Kato,Yasuhiko (1985) Negative Sentences in Japanese. Sophia Linguistica 19, The Graduate School of Language and Linguistics, Sophia University.

【付記】
本稿を成すにあたり、多くの方から貴重な御意見をいただいた。
特に、佐野真樹先生、沼田善子先生には草稿の段階で多くの御教示をいただいた。また、阿部二郎氏にはアイディアの段階から何度も議論にお付き合いいただいた。
ここに記して感謝申し上げる。

【訂正】

参考文献欄（p.249）
誤：中西久美子（1995）　→　正：中西久実子（1995）